

源氏論攷

近江の君

—風土的形成の特殊事情—

目加田さくを

(一) 近江の君の処遇

常夏の巻で、「いと暑き日東の釣殿」に出て、納涼して
いる源氏が、若君達を相手に、寛ぎの場の坐興に

「この頃世にあらむ事の少し珍らしく眠たさ醒めぬべか
らむこと語りて聞かせ給へ」

と注文し、自ら口火を切つて語り出すのが、近江の君の事
である。

「いかで聞きし事ぞや大臣のこの頃外腹の女尋ねいでて
かしづき給ふなるとまねぶ人なんありし真にや」と弁少

將弁に問ひ給へば

「……げにこの頃珍らしき世語になむ人々もし侍るなる
斯様の事こそ人の為自らけそんなる業に侍りけれ」……

少將と藤侍従とはいと辛しと思ひたり
と肩身狭く思うのである。父大臣すら、

この北の対の今姫君を如何にせむ賢しらに迎へるて來て

人斯う誇るとて還し送らむもいと輕々しく物狂ほしきや
うなりかくて籠めおきたれば真にかしづくべき心あるか
と人の言ひなすなるも妬し女御の御方などに交らはせて
然る痴のものにしないてむ人のいとかたはなるものに
言ひおとすなるかたちはたいとき言ふばかりにやはある
と思つており、娘の女御に

「かの人参らせむ見苦しからむ事などは老いしらへる女
房などして包まず言ひ教へさせ給ひて御覽ぜよ若き人々
の言種にはな笑はさせ給ひそうたて淡つけきやうなり」
と笑ひつゝ聞え給ふ

と言う、馬鹿にした態度である。双六をうつ今姫君は

手をいと切に押揉みて、「小賽々々」と言ふ声ぞいと舌
疾きやあなうたてと思つて……

相手をする五節の君という女房ともく、

いと浅へたる様どもしたり容貌はひぢぢかに流石に愛敬
づきたる方にて髪麗はしう罪輕げなるを額のいと近やか

なると聲の淡つけさにと捐はれたるなめり

取立てて好しとは無けれど他人と争ふべくもあらず鏡に
思ひ合はせられ給ふにいと宿世心づきなし

と、容貌も美人ではないが、性格は極めて単純・素朴・素
直ですらある。早口と教養の乏しさが致命的である。父に
注意されて、

舌の本性にこそは侍らめ幼く侍りし時だに故母の常に苦
しがり教へ侍りし妙法寺の別当大徳の産屋に侍りける肖
物となむ歎き侍りたうびしげにいかでこの舌疾さやめ侍
らむと思ひ騒ぎたるもいと孝の心深し……

近江国で生れた時に産屋に早口の大徳が加持祈禱でつめて
いた、それにあやかってしまったと亡母が歎いていました
と、素直に非を認めて、何とかして早口を改めたいと口に
しながら、その言葉はもう早口でべら／＼まくしたてる、
素直ないゝ面をもちながら、浅慮というか、お脳がいさゝ
か貧弱というか、自己の動作にわきまえない。父は、
「いと不調なる女設け侍りてもて煩ひ侍りぬ」と歎くが、
「物むづかしき折は近江の君みるこそ万づ紛るれ」とて唯
笑ひ種につくり給へど世の人は恥ぢがてらはしなめの給ふ
など様々(行幸)に取り沙汰し、篝火の巻では、世の嘲笑の的で
ある。

此の頃世の人の言種に内の大殿の今姫君と事にふれつゝ
言ひ散らす、

まことやかの内の大殿の御女の尚侍望みし君もさる者の、
癖なれば色めかしうさまよふ心さへ添ひてもて煩ひ給ふ
女御も遂に淡々しき事この君ぞ引き出でむともすれば
御胸潰し給へど大臣の今はな交らひそと制し宣ふをだに
聞き入れず交らひ出でて物し給ふ

と言うアプレぶりで、人もあろうに夕霧をみつけて

これぞなくと愛でてさゞめき騒ぐ声いとしるし人々い
と苦しと思ふに声いと爽かにて

沖つ船よるべ浪路に漂はゞ棹さしよらむ泊り教へよ

棚なし小船漕ぎ返り同じ人をやあな悪や

と積極的にアタックを試みる。驚いた夕霧は

いと怪しうこの御方には斯う用意なき事聞えぬものをと

思ひまはずにこの聞く人なりけりとをかしうて

寄るべなみ風の騒がす船人も思はぬ方に磯伝ひせず

と、ピシヤリと肘鉄を与える、という風に、貴族社会―源

氏世界―では、痴れ者として形成されているのである。父

兄にも、他人にも小馬鹿にされ、なぶり者にされる。源氏

世界で、この様なみじめな役割は、近江君と源氏だけで

ある。赤鼻の、精神甚だ迂遠な末摘花でさへ、源氏に引き

とられて、相当の品位を保ち得る処遇をうけ、余生は安楽

であった。源氏侍は、紫式部が源氏物語において、一向に註(1)

その人権を認めない「女房」階層であるから、話は自ら別
である。さすれば、「大臣の女」などという上流でありな

がら、この様な、みじめな役割・ピエロ的役割に終始させられるのは、近江君たゞ一人という事になる。さてこの源典侍、近江君・両者に小馬鹿にされる共通点を言えば、色めきたる方である。更に又、この近江の君は、何故に源氏世界で、「今姫君」だけで到底させなかつたか、である。何故に「近江の君」と設定したか。「近江の君」・「近江の君」と嘲笑の対象としたか。その、作家の心の秘密を探ってみよう。

(二) 平安朝文芸における近江の国の風土

近江の国は、その名、近^{ちか}つあはうみ―京都に近い淡水湖・琵琶湖―をもつ国、である。即ち、日本国内でも、屈指の景勝の地である。平安京に近く、その優雅壯麗なたゞずまいは、琵琶湖、平安朝にあっては、水うみ、とさへ言えば、万人歎息をもらすていの風土である。そこ出身―ここで生まれ、しかも大臣の落胤、母も近江の守の女であったか、北方となっていたか、とにかく近江君出生にさいして、別当大徳を産屋に侍らせうる権力と富をもった階層の婦人であるから、それ程身分低いものではない。その間の女が、なぜに源氏物語世界で、痴れ者として形成されねばならなかつたか。それは、紫式部自身の心の傷に由来しているものではなからうか。

大和に帝都を構える事の多かつた上代ですら、近江の国

は、犬養孝氏「万葉集の旅」^{144p}によれば、「万葉の故地は大坂府に次いで多く、歌・題詞・左註にわたり、総延べ数約百五十に及んでいる」という程である。

1 近江の湖の美観、万葉では、「あふみのうみ」だけで十五回に及ぶのである。

2 逢坂山・逢坂越は、東海・東山・北陸の諸道に通ずる古来の要衝である。

3 宮殿経営の地、左の六王朝の宮廷が営まれたのは、此の地であつた。

景行朝 志賀高穴穗宮（大津市坂本穴生町）
天智朝 大津宮（同 南滋賀町）
弘文朝 同

聖武朝 紫香樂宮（甲賀郡信樂町）

淳仁朝 保良宮（大津市石山寺附近）
称徳朝 同

4 志賀山寺（崇福寺）天智七年⁶⁶⁸に建立されて以来、壬申の乱で近江朝が亡んで後も、平安時代には殊に貴紳庶民を問わず、信仰をあつめていた。

5 湖北・湖西・水陸交通の要路で、湖北の愛発は北陸への要衝・四境の一である。塩津山越の難関は、越前・北陸へ旅する人々の印象に残っていたところである。

6 湖東・蒲生野は天智帝の遊獵・藁草狩りで有名である。

みつかさ山					
梨原	○				
守山	○				
近江		○			
			駅は		
				○	
					○

蜻蛉日記では、

a 唐崎の祓、に出かける叙述がある。

関の山路あはれくとおぼえてゆくさきをみやりたれば
ゆくゑもしらずみえわたりて鳥の二三ゐると見ゆるも
しるて思へば釣舟なるべしそこにぞ涙とゞめずなりぬ
るいふかひなき心だにかくおもへばましてこと人はあは
れとなくなりはしたなきまでおぼゆればめもみあはせら
れず

兼家の訪れが長く途絶えて、沈んでいた道綱母が、「心も
のべがてら」出かけた祓であったが、逢坂山の関をこえ
て、パツと眼前に展開する湖水の壮観に、はっと気をの
み、今迄鬱屈していた身心がときほぐされるまゝに感動の
涙がハラ／＼ととめどもなくおちる、同乗の女性皆が、感
傷的になって泣き出し、顔も見あわせられぬバツのわる
さ、というのである。

b 石山詣の往復の景観、感想をつづるあたりのスタイル
には姪の孝標女更級日記のそれが近似している。

夜の明るるまゝにみやりたれば東に風はいとのどかにて

霧たちわたり川のあなたは絵にかきたるようみえたり
川面に放ち馬どもあさりありくもはるかにみえたりいと
あはれなり……

c 志賀の山里、兼家のかつての愛人の一人、兼忠女の遺
児、兼家が放っておいた娘を養女にする条であるが、著者
の親身な思いやりが形成される志賀の景観の中で彷彿とし
ている。

便りをたづねてきけばこの人もしらぬおさなき人は十二
三のほどになりけりたゞそれひとり身をそへてなん
かの志賀の東のふもとに水うみを前にみ、志賀の山をし
りゑにみたるころのいふかたなう心ほそげなるに明か
し暮らしてあなるときゝて身をつめばなにはのことさ
るすまひにておもひのこしいひのこすらんとぞまづおも
ひやりける……

その後、劇的な兼家と娘との父子対面の情景が叙せられる
が、道綱母にとつても志賀・近江は、格別に印象ふかい風
土であったのである。

d 近江と名乗る愛人

うせ給ひぬる小野の宮の御召人どもありこれらを
ぞ思ひかくらん近江ぞあやしきことなどありて色めく者
なめればそれらにかよふと……

さて廿五日の夜宵うちすぎてのゝしる火のことなりけり
いとちかしなどさはぐをきけば憎しとおもふところなり

けり

「色めく者」と近江という愛人の事を激しい嫉妬の筆致でかいているが、実はこの「色めく」という評は、天下公認で、栄華物語（さまさまのよろこび）で、

対の御方いと色めかしう世のたはれ人に言ひ思はれ給へるに……

大式なりける人の女をいみじうかしづきめでたうてあらせける程にあまりすぎずきしうなりて色好みになりけり

という人物で、伯父実頼の召人であったが兼家の愛人となり、綏子を生み、その子道隆に通じて宮の御匣殿を生んだし、女の綏子も東宮に入内しながら源宰相頼定に通じ懐妊したと大鏡（兼家伝）に記す程であるから、殊更道綱母が「色好」としたわけではない。道綱母にも、「近江」と名乗る甚だ面白からぬライヴァルがあったわけである。

平仲物語では四十章段中志賀寺を背景にもつもの3（七八廿六）、又紫式部集、蜻蛉日記と同じく、近江守女にかわりをもつもの1（九）がある。志賀寺での3段、はいかにも十世紀の繊細多情な色好、インテリ青年らしいペイソスが漂う味わい深い章段形成である。平安人士が、いかに京に近い景勝の近江にしたしんだかが推察されるのである。

更級日記では

水うみのおもてはるくとしてなてしまちくふしまなといふ所の見えたるいとおもしろし勢多のはしみなくつれて……こころのくにをすきぬるにするかのきよみか関と相坂の関とはかりはなかりけり

と讃え、後年

石山にまいるゆきうちふりつみちのほとさへおかしきにあふさかのせきを見るにもむかしこえしも冬そかしと思いてらるゝにそのほとしもいとあらうふいたりあふさかの関のせき風ふくこゑはむかしきしにかはらさりけり

せきてらのいかめしうつくられたるを見るにもそのおりあらかつくりの御かほはかり見られしおり思いてられて年月のすきにけるもいとあはれ也うちいてのはまのほとなと見しにもかはらすくれかゝるほとに……

おもしろし、をかし、あはれなりと讃歎した景観をつぶさに記し、或いは上洛の道中見聞した諸国の景勝の中でも、最もすぐれていたもの二をあげるあたり、流石少女時代から作家の目を備えていてよく観察し、それを脳裏に鋭く印象づけていたのである。

はゝいみしかりし古代の人にてはつせにはあなおそろしならさかにて人にとられなはいかゝせむいし山せき山こえていとおそろしくらまはさる山ゐていてむいとおそろしやおやのほりてともかくもとさしはなちたる人のやう

に……わつかに清水にゐてこもりたり

と言うように、当時、現世利益、将来の幸運を祈る場合、人々がよく参詣するのは、初瀬寺・石山寺・鞍馬寺・清水寺であったのである。源氏物語の中でも、玉髪は上洛後、初瀬寺に参詣し運が開けたのであった。浮舟の女は彼女を石山寺に伴う予定であったが、皮肉にもすでに呪われた恋に墮ちていたため実現しなかった、とする。

(三) 近江の守の女と近江の君

紫式部集にみる限りでは、参詣参籠の記事は賀茂社だけである。

近江国関係記事は、恐らく、長徳二年父為時の任地越前に下向した際の道中詠とおもわれる、20—2478の六首の条である。

あふみの水うみにてみおかさきといふ所にあみ引くをみて

20 みおの海に網引く民のひまもてもたゆなくなちちるにつけて都恋しも
いそのはまに鶴の声くになしを

21 いそかくれ同じ心になつそなくなかおもひ出る人は誰そも
夕立しぬへしとて空のくもりてひらめくに

22 かき曇りゆふたつ浪のあらければうきたる舟そしつ心なき
しほつ山といふみちのいとしけきをしつのおのあやしき
さまともして猶からきみちなりやといふをきくと

23 しりぬ覽ゆきくにならす塩津山世にふる道はからきものそと

24 水うみにおいつしまといふすさきにむかひてわらはへの
うらといふ入うみのおかしきをくちすさみに

24 おいつしま島もる神やいさむ覽波もさはかぬわらはへの浦
水うみにていふきのやまの雪いとしろくみゆる

78 名に高きこしの白山ゆきなれて伊吹のたけをなにと社みね
集では、近江を除く京洛以外の地への旅行はさして外に見
当らない。恐らく父の任国越前にあってと想われるもの、
25 26 27が24につづいてみられるだけである。

あまり地方へ遊山に出る事もなかったらしい紫式部にと
って、父の任国越前は物珍らしかった筈であり、その道中
の近江国こそは、どんなにか心躍る景観であった筈であ
る。げんに、③で、入うみの美観を「おかしきを」と記し
ながら、一向に才筆であるべき彼女の筆は冴えない。童の
浦を爰にひねくって「波のさはがぬ」は「神がいさむら
ん」などと詠じ出すにすぎない、いかにも気のはれぬ態度
である。水うみの美に感動する風が全くない。①②④のよ
うな、妙に沈んだ、憂鬱な表現は何故か。心は他にひかれ
るものがある、即ち都恋しも、その都恋しもとは何か。で
ある。それは越前だと想われる25以下でも同様の事がいえ
る。

こよみにはつ雪ふるとかきたる日目に近くひののたけと

いふ山の高いとふかうみやらるれば

25 こゝにかくひのゝ杉むら埋む雪をしほの松にけふやまかへる

返し

26 おしほ山松のうは葉にけふやさはみねのうす雪花と見ゆ覽
ふりつみていとむつかしき雪をかきすてゝ山のやうにし
なしたるに人々のほりて猶これ出てみたまへといへば

27 古里に帰る山ちのそれならはこゝろやゆくと雪も見てまし
25 27も京の恋しさであつて、折角下向した越前の国の風土
には全く関心がなく、いまわしい⑤―ばかりである。他
の人々は、⑥のように、雪の山にのぼつてうち興じ、式部
をも誘う程、有頂天になつてゐるのである。

彼女が憂鬱におちている原因は、つづく28の詠で解明さ
れるようである。

としかへりてから人みにゆかんといひける人の春はとく
るものといかてしらせたてまつらむといひたるに

28 春なれと白ねのみ雪いや積りとくへきほといつとなきか
な

宣孝との交際が始まっていたが、まだ結婚という段階にま
で到っていなかったために、彼女としては後髪をひかれ
る思いで父の任国越前へ下向していたと想われる。宣孝
は、それに対し、春になったら、敦賀へ着く唐人をみにい
きますよ―貴女にあいに越前まで行きますよ、と約束して

いたが、春になつても訪れず、「春風には氷もとけるもの
ですよ、いゝ加減私におなびきなさいね。」などと書状を
よこすだけであつたので、20―24の詠歌及びその詞書を形
成せざるをえなかつた。自己に対して、さして熱意のない
京の恋人を、それでも、その言葉を信じて、僻遠の越前な
ぞで一人侘しくすごす―というのが、紫式部の心情であ
る。言葉の上では結婚を急ぐ宣孝を頼つて、父を離れて一
人京に戻る決心がつきにくい情況であつたのである。それ
はつづく29のような事情があつたのである。

あふみのかみのむすめにけさうすとさく人のふたこゝろ
なしなとつねにいひわたりければうるさくて

29 水海に友呼千鳥ことならはやすのみなとにこゑたえなせそ
式部にしきりと言ひ寄りながら、他方、近江守の女にも言
ひよる凶々しい男の態度に対して、29のように皮肉をいう
のであるが、その為にかく絶交する、というわけにもいか
ぬ事情が紫式部の側にあつたらしい。「うるさくて」とい
う表現は絶交ではない。宣孝の巧みな口説きを、表面迷惑
がりながらも、これをうけ入れている態度である。噂は嘘
であれかし、真実は自己のみを愛してくれる君であれかし
―宣孝の言のように―と念じながら、いや味を言い送つた
文である。と言うのは、続く30 31では二人の交際は進行の
度を速めているからである。

うたゑにあまのしほやくかたをかきてこりつみたるなけ

きのもとにかきて返しやる

30 四方の海に塩焼あまの心からやくとはかゝる歎きをやつむ

ふみのうへに朱といふ物をつふくとぞゝきかけてなみ

たの色をとかきたる人のかへしに

31 くれなるの涙にいととまるとつる心の色とみゆれは

29 30 何れも紫式部の歌ばかりで宣孝の歌はないが、朱を

紙面にポタポタとそそいで、「貴女を恋うて泣く私の涙で

す」などと大胆なやり口の宣孝に、⑦と危んで「うとまる

ゝ」と言いながらも、惹きつけられてゆく式部の姿勢が窺

われるのである。

即ち、危ぶみながらも、恋の橋を渡りかける悦びに式部が

浸ったのも束の間、

もとより人のむすめをえたる人なりけりふみちらしけり

ときゝてありしふみもとりあつめておこせすは返事かゝ

しとことにはにてのみいひやりければみなをこすとていみ

しくえんしたりければ正月十日はかりの事成けり

32 とちたりしうへのうすらひとけなからさはたえねとや山の

下水

すかされていとくろうなりたるにをこせたる

33 東風にとくる計をそこみゆるいしまの水はたえはたえなむ

今は物もきこえしとはらたちたればわらひて返し

34 いひたえはさ社はたえめなにかそのみはらの池に堤しもせ

ん

夜中はかりに又

35 たけからぬ人かす波はわき返り三原の池にたてとかひなし

近江の守の女とも宣孝は結婚していたのであった。その事

を知って興奮した式部は、凶々しい宣孝に、彼があちこち

にもち出してはみせているらしい自分の文を、「すっかり

返して欲しい」と口上で言わせたのである。宣孝はとりま

とめて式部の文を返したが、「何もそんなにまでしなくと

も」とひどく怨んだ。これに対し式部が送った32の歌は、

とりなすような、宣孝の怒りを⑧すかしなだめるような風

情がある。それに対し、猶も33で宣孝は、「貴女の情は、

ほんの表面だけだ。本当の情愛なんてもんぢゃあない。も

う絶交してもいゝ。」などと怒り、「もう物も申しあげぬ。」

と腹をたてた。それに対し、⑨の「わらひて返し」とは、

実に老練というか、古女房じみたやり方で、34の歌で、今

度は此方が怒ってみせて、結局、式部のおもわく通り、宣

孝は、35で折れて出た。そして、

桜をかめにさして見るにとりもあへずちりければ桃の花

をみやりて

36 おりて見ばちかまさりせよ桃の花思ひくまなき桜おしまじ

返し人

37 桃といふ名もある物を時の間にちる桜にも思ひおとさし

という、めでたしめでたしに、漸くおちついたのであっ

た。もともと、式部は宣孝が文をちらした事に怒ったので

はない。「人の女をえたる人なりけり」の表現にこもる恨み、の捌け口だったのであるから、表面、文をとり返すという一件のゴタゴタで、とうとう宣孝に「みはらの池にたてとかひなし」、腹をたててもかなわなかった。私の負けだ。勘弁してくれ—(裏面に近江守女との結婚の詫び)—と、頭を下げさせて、事、落着となったのである。実は、それで、紫式部が、近江守女と宣孝との結婚をも認めさせられた事となったわけである。

紫式部は、現在の自己の家門からも、容姿からも、さしたる理想の男性を夫に迎える事が出来そうもないと半ば諦め、まあ、現実的にいって分相応とみななければなるまい宣孝の求婚を悦ぶ気持があったればこそ、つまりは結ばれたのである。夫の愛情に期待もかけていたとおもわれる。とすると、自己の結婚と相前後して宣孝と結ばれたライヴァル近江守の女は甚だ憎いわけである。紫式部日記で、文芸上のライヴァル清少納言をはじめ、齋院の中将・和泉式部に對して、あの様に憤しきも忘れて感情的にやっつける式部である。彼女の心の中で、近江守女はさぞや、こっぴどく罵られやっつけられていたであろう。家集の中で近江守女をやっつける事は式部のプライドが許さない。むしろ、29のように優越感をもって、「近江の君を御大事に遊ばせ」と詠むにとどめただけに、彼女の心の奥にしこりとなつて、その怨みは残っていたのではあるまいか。

近江守の女は娘時代を近江で過したのではあるまいか。宣孝が求婚したのは、京の留守宅ではなく、近江へ出むいたものか。豁達な彼ならば近江ぐらゐは苦にもすまい。或いはそれ故に、宣孝の近江通い—御獄に美々しく着飾って話題をまいた程の人物であるから、派手ないでたちでの—が、他人の風評を事とする経薄な都人士の噂となつて巷間に流れたとすれば、式部としては一層苦々しい次第である。妙法寺大徳の舌疾さのあえもの、近江の君の早口も、或いは磊落な宣孝が、笑い話として式部の御機嫌とりに話して聞かせた事実、近江守の女の舌疾さ、「近江の君」の容姿も、宣孝が生きていて源氏物語の「近江の君」の条を披見したならば、その執念のすさまじさに彼ですら興ざめるていの、宣孝がオーヴァーに話してきた近江守の女の容姿・性格、或いは教養のなさ等がそのまま「近江の君」に再現されていたのではあるまいか。ライヴァル近江守の女を、自己の創作した源氏物語の世界で、同じ「近江の君」と名乗らせて、色好みで、早口で、素直だが教養がなく、男性を惹きつける魅力は一寸位はあるが、又決して美人ではなかった、素養なぞまるでない田舎者、と世人に嘲笑させる役に形成する事によって、まどかなるべき新婚の夢を引き割かれた恨みを報いたものではあるまいか、という次第である。長篇源氏物語に、「みづうみ」乃至「近江の国」の歎賞される景觀は形成されずじまいであ

る。(関屋の巻がありながら事件が叙されるのみである。) 紫式部にとって、近江国の印象は、更級日記の著者・蜻蛉日記の著者・平仲の場合のようには、虚心に詠歎・讚美出来なかったものようである。宣孝との進捗しない恋が気持を重くしていた頃、近江をへて越前へ行ったのであり、琵琶湖の美観も心を楽しませない程、真剣であった宣孝との結婚、紫式部側から言えば、近江守の女の出現によって災されたというわけで、甚だ近江は芳しからぬ「名」になってしまっていたのである。

(一九七〇年)

註(1)源氏物語において、女房階層の女性は一人も光君をはじめ貴公子の恋愛の対等の相手とされる事がない。あくまでも「御召人」乃至かりそめの浮気のやり場にすぎない。不倫を知った薫が、似たもの同志、どうとでもなれと浮舟をすてる気になったが、自分が浮舟をすてたら、将来浮舟は多情な匂宮にすさめられて、妹宮の女房にされるだろう、先例があるから。それをみるような事となったら、自分は堪えられぬと薫がおもいかえす条がある。女房とはそのような者と紫式部は設定しているのである。